

職業に対する認知の発達及び職業に対する就職希求

松 本 卓 三

岡山理科大学理学部

(1994年9月30日 受理)

問 題

進路選択に影響を及ぼす要因あるいは職業選択を規定する要因は、今までの諸研究によれば、非常にその数が多く、かつ複雑なものであると言われている。小川・田中(1979)は、個人の職業選択に関係する要因は、個人の側における要因と環境的要因とに大別して考えることができる、と言っている。仙崎(1988)は、職業選択の規定要因は大別すると、環境的・文化的・社会的要因と個人的・心理的決定要因の2つが考えられる、と述べている。こうしたことから、進路選択に影響を及ぼす要因には、主として、個人的要因と環境的要因の2つを考えることができよう。

本研究では、職業に対する認知の発達と職業に対する就職希求(職業別就職希求)の問題を取り上げたが、それらは、何れも主として個人的要因に関する問題で、広く捉えれば、職業観の問題でもあるといえる。そこで、この職業観について考えてみることにする。職業観とは、どういうことなのか。それは、広井(1982b)によれば、次の3つのことであると言う。(1)個人が職業に関して持っている知識や理解の内容：職業の個人的定義と職業について認知している内容。(2)個人が職業に対して抱いている興味、態度等：情緒的反応としての職業に対する興味また好悪感、あるいは態度。(3)個人の勤労意欲、労働目的意識等。こうしたことから考えると、本研究での職業に対する認知は、彼の言う(1)の職業について認知している内容に関係し、職業に対する就職希求は(2)に当たるのではないかと思う。

先ず、職業に対する認知の発達に関することについて考えてみたい。職業に対する認知の発達が、どのようになっているかを明らかにすることは、職業的社会化の過程や職業観・職業意識の形成を明らかにする上で有益なことと考えられる。この職業的社会化とは、松本・熊谷(1922)によれば、その社会で期待される労働や職業の意識を見だし、職業人としての態度や価値観などを獲得していくことを指す。また、この職業的社会化がなされるには、種々の社会(環境)からの働きかけがあり、広井(1982a)によると、社会の働きかけは、その社会の代理者としてのエイジェントを通して行われるもので、このエイジェントとしては、家族、友人、学校、地域社会、マス・メディア等が挙げられる。また、Super(1957)が、職業生活を(1)成長段階：空想期(4歳から10歳)、興味期(11歳から12歳)、

能力期（13歳から14歳）、(2)探索段階（15歳から24歳）、(3)～(5)の段階は略、のように5段階に区分しているが、この抽象的な職業生活の発達区分と職業に対する認知の発達をある程度関連付けるためにも、この職業に対する認知の発達を明らかにしていくことは意味のあることだと思う。そこで、どの発達段階で、どのような職業が認知されたかという職業に対する認知の発達を明らかにしていくことは、進路選択の行動について研究する場合の最も基礎的なものであると思う。しかし、どのような職業が、どの発達時期に認知されているかという研究は、抽象的で、具体的なものは数少ないように思う。次に、職業に対する認知の発達についての数少ない具体的な研究例を挙げる。竹内（1976）は、中学生を対象に職業の知識量と内容理解度を調査している。彼は、職業の知識量に関しては、知っている職業名を15分間にできるだけ多く書かせ、内容理解度はアナウンサー、美容師など20の職種の必要資格、訓練、適性について回答させている。その結果、職業名の平均記述数は、1年16.3、2年21.3、3年28.8と学年が進行するにつれて増加傾向にあることがわかった。また、職業の内容理解度は、100点満点で、1年54.8、2年61.0、3年62.7というように学年が進行するにつれて増加する傾向があった。主として竹内（1976）の研究等を参考にして、本研究の研究Iでは、特に、どの発達段階で、どのような職業が認知されているのかを問題にしていきたい。いうまでもなく、職業に対する認知の発達は、主として個人的・心理的要因（人格・興味、能力等）と種々の社会のエージェントによる影響を受けてなされると考えられる。

次に、職業に対する就職希求（職業別就職希求）の問題を考えてみる。職業に対する就職希求は、広井(1982b)の主張する職業観のうちの、個人が職業に対して抱いている興味、態度に対応すると思う。橋本（1973, 1974）は、職業認知を中心とする側面は小学校の高学年の段階で重要な役割を果たし、中学生期では、職業興味を中心とする側面が主要な役割を果たしており、中学生段階では成人の職業興味の構造とほぼ等しい、と言っている。また、熊谷（1981）は、職業興味の安定化の諸研究より、職業興味が安定してくるのは、20歳代以降であると、述べている。これらからすると、職業興味は、一種の職業に対する態度とでもいうべきものとも考えられ、職業に対する認知の発達よりも後に発達し、個人の職業選択により大きな影響を及ぼすものと考えられる。館・松本・渡辺・松本（1984）によれば、工学部学生は、研究者、鉱工業技術者、大学教授等の職業が好まれ、労務、セールスマン、サービス等の職業が嫌われている、と言っている。大根田（1992）によっても、希望する職業について、大学工学部の学生は、技術、研究、情報処理等の職業が希望する順位が高い、ということであった。これらの諸研究は、前もって研究者が考えた職業に対する興味や好悪を中心とした研究が多く、職業に対する就職希求の程度についての研究は少ないのではないかと思う。これらの諸研究から、本研究の研究IIでは、本研究の研究Iの結果に基づき、認知度の高い職業のみを取り上げて、それらの職業に対する就職希求の程度とその因子構造を明らかにしていきたいと思う。

本研究で予想される結果について、次に述べる。

1. 家族等の身近な人に影響を受けたと思われる職業の認知は、発達の早期に認知がなされるであろう。学校やマス・メディア等の影響を受けたと思われる職業の認知がそれに続くであろう。特に専門的な職業についての認知は、かなり遅くなってなされるであろう。
2. 職業に対する就職希求は、専門的・技術的な職業に対する就職希求が強く、労務的な職業に対する就職希求が弱いであろう。
3. 職業に対する就職希求の因子分析では、職業による自己実現という観点からの因子が数個程度抽出されるであろう。

なお、本研究では、理系大学生男子を調査対象としたが、その理由は、今後の研究において、理系大学生男子に焦点を当てた研究を進めていきたいと考えているからである。

研 究 I

目 的

職業の認知の発達を、それぞれの職業についてどのようになっているかを明らかにする。

方 法

被調査者 大学工学部3, 4年生の男子96名。

調査時期 1989年10月

調査内容 次の3種類の調査を実施した。

調査1. は「あなたが、思い浮かべられる職業（仕事）名について、思い浮かんだ順に、出来るだけ具体的に書いてください。例えば“何なにの何”のように書いてください。」という質問をして、出来るだけ多くの職業（仕事）名を挙げさせた。また、正確に職業（仕事）名が書けない職業については、わかるように詳しく書くように指示した。調査時間は、竹内（1976）を参考にして、20分とした。

調査2. は「あなたが挙げた職業（仕事）名について、その内容をどの程度知っているか、それぞれ挙げた職業（仕事）名について、よく知っている場合は○の符号を、少し知っている場合は△の符号を、知らない場合は×の符号をつけてください。」という質問をして、当てはまる符号を上記の調査で挙げた職業（仕事）名の右上に記入させた。

調査3. 「知っていると答えた職業（仕事）について、いつ頃の時期に、その職業（仕事）を知ったか、該当する時期を符号で答えなさい。」という質問をした。職業（仕事）を知った時期の符号は、「小学校入学以前：(A)」、「小学校時代：(B)」、「中学校時代：(C)」、「高等学校時代：(D)」、「大学時代：(E)」である。

職業に対する認知の発達を調査する方法としては、横断的方法と回想的方法との2つの方法があると思う。大学生になると、かなりの職業の内容把握がなされており、多少のずれはあっても、ほぼ的確に職業に対する認知時期を答えることができるのではないかと考

え、後者の回想的な調査を実施した。

結果と考察

1. 職業の記述数

職業名の記述数は Table I の通りで、平均記述数は50.20であった。これは、竹内(1976)の研究と比べると、やはり大学生になると、種々の環境からの影響を受けて、かなりの職業が挙げられていると思う。記述された職業名を労働省職業安定局・雇用職業総合研究所(編)(1986)「労働省職業分類(昭和61年版)」に従って整理した(Table II)。「A. 専門的・技術的職業」が40.19%で最も多かった。「D. 販売の職業」、「I. 技能工等及び労務の職業」、「H. 運輸・通信の職業」、「E. サービスの職業」、「C. 事務的職業」は、何れも10%前後の割合であった。「F. 保安の職業」、「G. 農林・漁業の職業」、「B. 管理的職業」は、何れも6%以下の割合であった。

この結果をみると、大学生は、身近な専門的・技術的職業や幼少の頃から非常になじみのある職業を挙げていると思う。

2. 職業の認知の程度

挙げられた職業についての認知の程度について述べる。調査対象者の半数以上の者が挙げた35の職業について、その認知の程度(○は3点、△は2点、×は1点とした)の平均値(以下、*M* と略)と標準偏差(以下、*SD* と略)を算出した(Table III)。それら35の職

Table I 職業名(仕事名)の記述数 (N = 96)

記述総数	<i>M</i>	<i>SD</i>	最高記述数	最低記述数
4819	50.20	15.90	88	18

Table II 記述職業名(仕事名)の職業分類

大分類	小分類の職業数	記述職業総数	%
A. 専門的・技術的職業	133	1937	40.19
B. 管理的職業	14	127	2.64
C. 事務的職業	27	344	7.14
D. 販売の職業	31	697	14.46
E. サービスの職業	37	369	7.66
F. 保安の職業	14	269	5.58
G. 農林・漁業の職業	16	165	3.42
H. 運輸・通信の職業	23	412	8.55
I. 技能工等及び労務の職業	94	461	9.57
分類不能の職業	1	38	.79
合計	390	4819	100.00

業をみると、「22. 制作・演出家」と「27. 管理的公務員」を除いては M が2.00以上の値になっている。従って、それらの職業の内容については、かなりよく知っていると考えてよいと思う。この結果から、身近な、例えば魚屋さん（小売店）のような職業、関心の高い、例えば鉱工業技術者のような職業の認知の程度が高いことがわかる。

Table III 職業の記述総数と職業の認知度の平均値と標準偏差 ($N = 96$)

No.	職業名	記述総数	M	SD
1	小売店	413	2.46	.65
2	職業スポーツ家	231	2.41	.71
3	教員	133	2.66	.55
4	鉱工業技術者	122	2.27	.69
5	裁判官	116	2.03	.66
6	建設の職業	115	2.16	.71
7	一般事務所事務員	115	2.21	.65
8	医師	112	2.29	.66
9	警察官	107	2.30	.71
10	販売店員	107	2.51	.66
11	営業・販売事務員	105	2.17	.68
12	文芸家	93	2.40	.69
13	農業の職業	90	2.44	.62
14	記者	90	2.37	.64
15	音楽家	89	2.29	.77
16	飲食店	88	2.28	.66
17	情報処理技術者	87	2.37	.68
18	俳優	81	2.33	.61
19	タクシー運転手	72	2.53	.62
20	パイロット	72	2.00	.71
21	看護婦（士）	69	2.49	.65
22	制作・演出家	67	1.96	.61
23	トラック運転手	66	2.32	.74
24	給仕従事者	64	2.38	.67
25	アナウンサー	64	2.16	.71
26	バス運転手	62	2.40	.75
27	管理的公務員	61	1.97	.77
28	消防員	61	2.25	.67
29	漁業の職業	59	2.22	.71
30	調理人	58	2.24	.68
31	自衛官	58	2.16	.76
32	自動車整備士	57	2.44	.76
33	デザイナー	57	2.07	.70
34	販売外交員	56	2.14	.83
35	画家・書家	52	2.13	.71

(注) 職業の認知の程度は、記述した職業について、よく知っている職業 (○) は3点、少し知っている職業 (△) は2点、知らない職業 (×) は1点として、 M と SD を算出した。

3. 職業に対する認知の発達

この35のそれぞれの職業（認知度の高い職業）について、職業を認知した時期について百分比を算出した（Table IV）。そして、それを基にして、田中・垂水・脇本（1984）に従って、クラスター分析（階層的クラスター分析：最短距離法）を行った（Fig. 1）。このクラスター分析の結果に基づいて、非類似度(dissimilarity, すなわちユークリッド平方距離：squared Euclidean distance)の値が125.00の所が分析結果の図をみて妥当であると考えて、職業の認知時期によるグループ分けをした。

その結果、11の職業群に分類することが出来た（Table V）。11の職業群に含まれる職業

Table IV 認知度の高い職業についての認知した時期

(N = 96)

No.	職業名	A. 小学校入学以前	B. 小学校時代	C. 中学校時代	D. 高等学校時代	E. 大学時代	計
1	小売店	142 (34.38)	231 (55.93)	27 (6.54)	8 (1.94)	5 (1.21)	413 (100.00)
2	職業スポーツ家	44 (19.05)	123 (53.24)	45 (19.48)	16 (6.93)	3 (1.30)	231 (100.00)
3	教員	55 (41.35)	72 (54.13)	3 (2.26)	3 (2.26)	0 (0.00)	133 (100.00)
4	鉱工業技術者	5 (4.10)	42 (34.42)	48 (39.34)	14 (11.48)	13 (10.66)	122 (100.00)
5	裁判官	1 (0.86)	67 (57.76)	42 (36.21)	6 (5.17)	0 (0.00)	116 (100.00)
6	建設の職業	23 (20.00)	55 (47.78)	22 (19.13)	12 (10.43)	3 (2.61)	115 (100.00)
7	一般事務所事務員	7 (6.09)	63 (54.78)	23 (20.00)	18 (15.65)	4 (3.48)	115 (100.00)
8	医師	50 (44.64)	50 (44.64)	10 (8.93)	1 (0.89)	1 (0.89)	112 (100.00)
9	警察官	62 (57.95)	33 (30.84)	11 (10.28)	1 (0.93)	0 (0.00)	107 (100.00)
10	販売店員	24 (22.43)	43 (40.19)	15 (14.02)	24 (22.43)	1 (0.93)	107 (100.00)
11	営業・販売事務員	3 (2.86)	54 (51.43)	30 (28.57)	14 (13.33)	4 (3.81)	105 (100.00)
12	文芸家	3 (3.23)	38 (40.86)	42 (45.16)	7 (7.52)	3 (3.23)	93 (100.00)
13	農業の職業	46 (51.11)	39 (43.33)	5 (5.56)	0 (0.00)	0 (0.00)	90 (100.00)
14	記者	5 (5.56)	40 (44.44)	34 (37.77)	5 (5.56)	6 (6.67)	90 (100.00)
15	音楽家	14 (15.73)	49 (55.06)	22 (24.72)	1 (1.12)	3 (3.37)	89 (100.00)
16	飲食店	16 (18.18)	40 (45.46)	24 (27.27)	7 (7.95)	1 (1.14)	88 (100.00)
17	情報処理技術者	0 (0.00)	11 (12.64)	28 (32.18)	28 (32.18)	20 (23.00)	87 (100.00)
18	俳優	12 (14.81)	44 (54.33)	18 (22.22)	4 (4.94)	3 (3.70)	81 (100.00)
19	タクシー運転手	28 (38.89)	38 (52.78)	6 (8.33)	0 (0.00)	0 (0.00)	72 (100.00)
20	パイロット	23 (31.94)	43 (59.72)	3 (4.17)	3 (4.17)	0 (0.00)	72 (100.00)
21	看護婦(士)	24 (34.78)	35 (50.72)	6 (8.70)	4 (5.80)	0 (0.00)	69 (100.00)
22	制作・演出家	0 (0.00)	20 (29.85)	35 (52.24)	9 (13.43)	3 (4.48)	67 (100.00)
23	トラック運転手	12 (18.18)	41 (62.13)	12 (18.18)	1 (1.51)	0 (0.00)	66 (100.00)
24	給仕従事者	5 (7.81)	39 (60.94)	9 (14.06)	11 (17.19)	0 (0.00)	64 (100.00)
25	アナウンサー	4 (6.25)	37 (57.81)	17 (26.56)	6 (9.38)	0 (0.00)	64 (100.00)
26	バス運転手	33 (53.23)	26 (41.94)	3 (4.83)	0 (0.00)	0 (0.00)	62 (100.00)
27	管理的公務員	3 (4.92)	39 (63.93)	17 (27.87)	2 (3.28)	0 (0.00)	61 (100.00)
28	消防員	25 (40.98)	30 (49.18)	6 (9.84)	0 (0.00)	0 (0.00)	61 (100.00)
29	漁業の職業	17 (28.81)	37 (62.71)	4 (6.78)	0 (0.00)	1 (1.70)	59 (100.00)
30	調理人	6 (10.34)	22 (37.93)	28 (48.28)	2 (3.45)	0 (0.00)	58 (100.00)
31	自衛官	4 (6.90)	35 (60.35)	13 (22.41)	6 (10.34)	0 (0.00)	58 (100.00)
32	自動車整備士	4 (7.02)	17 (29.82)	20 (35.09)	13 (22.81)	3 (5.26)	57 (100.00)
33	デザイナー	0 (0.00)	14 (24.56)	25 (43.86)	16 (28.07)	2 (3.51)	57 (100.00)
34	販売外交員	0 (0.00)	24 (42.85)	10 (17.86)	12 (21.43)	10 (17.86)	56 (100.00)
35	画家・書家	4 (7.69)	27 (51.92)	21 (40.39)	0 (0.00)	0 (0.00)	52 (100.00)

(注) 表中の左側の数字は記述総数を、右側の()内の数字は%を示す。

は Table V の (注) に示した。職業の認知時期に関するこれら11の職業群間の比較を x^2 検定によって行ったところ、 $x^2=1249.13$, $df=40$, $p<.001$ で11の職業群間に有意差が認められた。さらに、下位検定として、職業の認知時期に関する2群間の比較を x^2 検定によって行ったところ、「9. 制作・演出家」と「8. 鉦工業技術者」との間、及び「9. 制作・演出家」と「10. デザイナー」との間に有意差が認められなかったのを除けば、他の職業群の間にはすべて有意差が認められた (Table VI)。

これらの結果から、職業に対する認知の発達時期は、分析結果の図を見て、非類似度の値が250.00の所で、職業群に対する認知時期をより大きく3つに分類することができる。この分類によって、職業に対する認知の発達時期はより把握しやすくなると思う。次に、

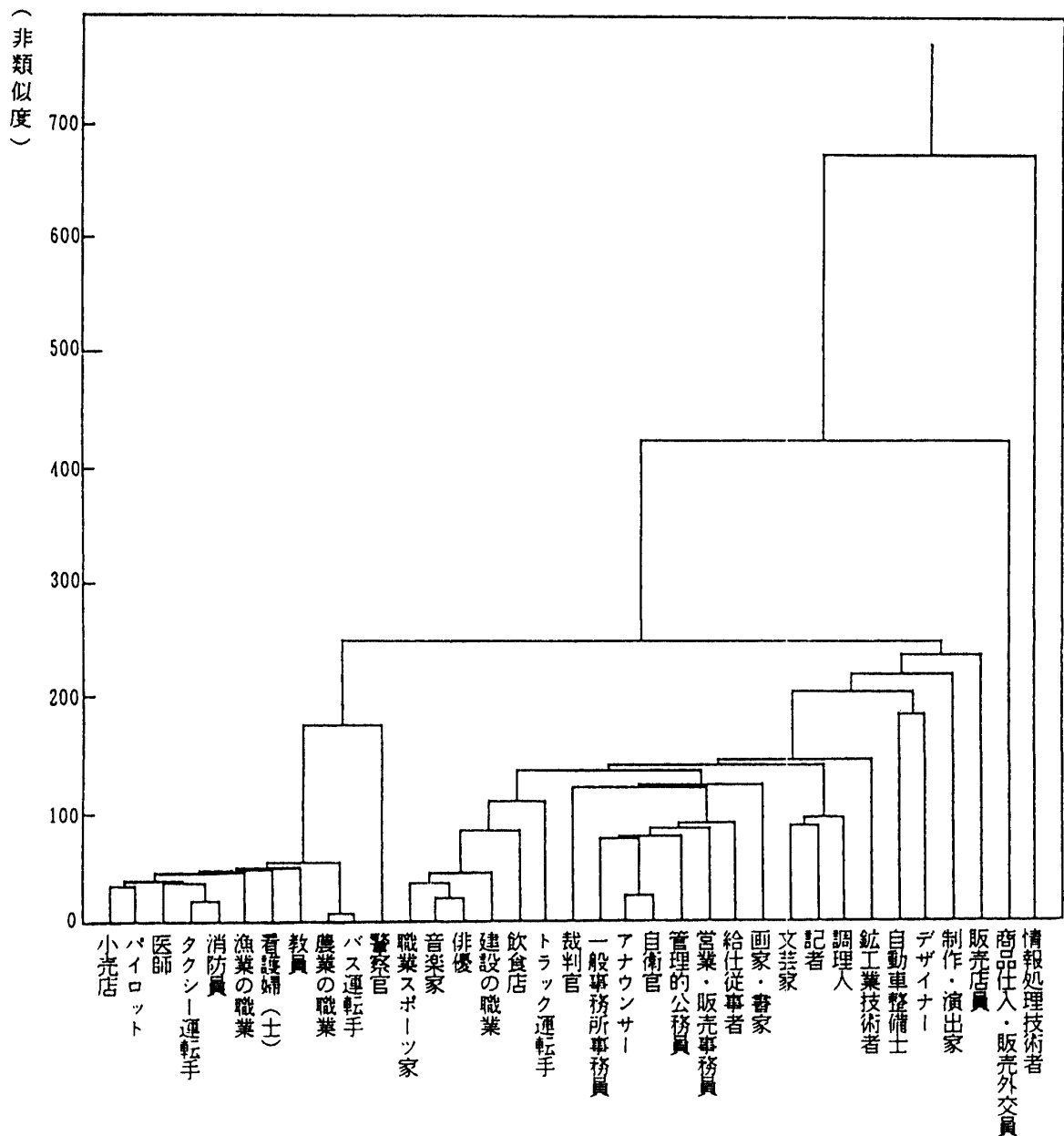


Fig. 1 認知度の高い職業の認知時期についてのクラスター分析結果 (階層的クラスター分析: 最短距離法)

Table V 認知度の高い職業の認知時期によってグループ分けした職業群 (N = 96)

職業群 No.	A. 小学校入学以前	B. 小学校時代	C. 中学校時代	D. 高等学校時代	E. 大学時代	計
1	62 (57.95)	33 (30.84)	11 (10.28)	1 (0.93)	0 (0.00)	107 (100.00)
2	433 (38.76)	601 (52.58)	73 (6.39)	19 (1.66)	7 (0.61)	1143 (100.00)
3	121 (18.06)	352 (52.54)	143 (21.34)	41 (6.12)	13 (1.94)	670 (100.00)
4	24 (22.43)	43 (40.19)	15 (14.02)	24 (22.43)	1 (0.93)	107 (100.00)
5	31 (4.88)	361 (56.85)	172 (27.09)	63 (9.92)	8 (1.26)	635 (100.00)
6	14 (5.81)	100 (41.19)	104 (43.15)	14 (5.81)	9 (3.73)	241 (100.00)
7	0 (0.00)	24 (42.85)	10 (17.86)	12 (21.43)	10 (17.86)	56 (100.00)
8	5 (4.10)	42 (34.42)	48 (39.34)	14 (11.48)	13 (10.66)	122 (100.00)
9	0 (0.00)	20 (29.85)	35 (52.24)	9 (13.43)	3 (4.48)	67 (100.00)
10	4 (3.51)	31 (27.19)	45 (39.47)	29 (25.44)	5 (4.39)	114 (100.00)
11	0 (0.00)	11 (12.64)	28 (32.18)	28 (32.18)	20 (23.00)	87 (100.00)

(注) 各職業群に含まれる職業名は、つぎの通りである。

1. 警察官
2. 小売店, パイロット, 医師, 消防員, タクシー運転手, 漁業の職業, 教員, 看護婦(士), 農業の職業, バス運転手
3. 職業スポーツ家, 音学家, 俳優, 建設の職業, 飲食店, トラック運転手
4. 販売店員
5. 裁判官, 一般事務所事務員, 自衛官, アナウンサー, 管理的公務員, 営業・販売事務員, 給仕従事者, 画家・書家
6. 文芸家, 記者, 調理人
7. 販売外交員
8. 鉱工業技術者
9. 制作・演出家
10. 自動車整備士, デザイナー
11. 情報処理技術者

表中の上の数字は記述総数を, 下の()内の数字は%を示す。

$\chi^2=1249.13$, $df=40$, $p<.001$

Table VI 認知度の高い職業の認知時期によってグループ分けした職業群間の比較

職業群 No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1											
2	***	***									
3	***	***									
4	***	***	***								
5	***	***	***	***							
6	***	***	***	***	***						
7	***	***	***	***	***	***					
8	***	***	***	***	***	*	*				
9	***	***	***	***	***	*	***				
10	***	***	***	***	***	***	**	*			
11	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	

(注) 職業群に含まれる職業名は, Table V に示してある。

χ^2 検定により, 職業群間の有意性の検定を行った。何れも, $df=4$ 。

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

それら3つの分類について述べる。小学校入学以前の時期にかなり認知されている職業は、1, 2の職業群である。それらの職業は幼少の時期において身近な。特に、両親等の影響によって認知された職業であると考えられ、小学校時代までに、ほぼ認知がなされている職業である。小学校時代から中学校時代にかけて、かなり認知されている職業は、3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10の職業群で、それらの職業は、学校やマス・メディア等によってその認知がかなり強く影響を受けた職業であると考えられる。それらの職業群のうち、特に4, 7, 10の職業群は、高等学校時代に何れも20%強の者がその認知をしていることが注目され、職業に対する認知についてかなり個人差のある職業といえる。また、11の職業群は、中学校時代、高等学校時代に職業に対する認知をしたとする者が、それぞれ30%を越え、大学時代にその認知をしたとする者が20%少々おり、この職業群も職業に対する認知について、かなり個人差のある職業といえる。こうしたことは、Super (1957) が述べている5段階の職業生活区分にほぼ当てはまる結果がでていようように思う。すなわち、小学校入学以前の時期に認知されている職業は彼のいう空想期に、小学校時代から中学校時代に認知されている職業は彼のいう興味期と能力期に、それぞれ対応していると考えられる。

研 究 II

目 的

認知度の高い職業について、どの程度それらの職業に就いてみたいかという就職希求度、および職業に対する就職希求の因子構造を明らかにする。

方 法

被調査者 大学工学部3, 4年生の男子108名。

調査時期 1990年1月

調査内容 「次に挙げてある職業は、あなたたちが、かなりよく知っている職業です。それらの職業に、今、現在、就くとしたら、あなたは、どの程度その職業に就きたいと思えますか。自分の能力・性格や周囲の状況をあまり考えずに、楽な気持ちで、それらの職業に就きたい程度を答えてください。」という質問をして5段階で、その程度を答えさせた。なお、この調査で挙げた職業は、研究Iの調査結果より得られた職業に対する認知度の高い35の職業の他、館他(1984)および大根田(1992)を参考にして、工学部の学生にもわりと職業に対する就職希求のある「36. 大学教授・研究者」の1つを加えた36の職業である (Table VII, VIII)。

結果と考察

1. 認知度の高い職業に対する就職希求度

職業に対する就職希求度の M と SD を算出した (Table VII)。職業に対する就職希求度の M が3.50以上の職業は「4. 鉱工業技術者」, 「17. 情報処理技術者」, 「36. 大学教

授・研究者」であった。それらの中でも「4. 鉱工業技術者」は、職業に対する就職希求度が非常に高く、 M が4.56もの高い値になっている。こうしたことは工学系の学生の特徴であろう。次に、職業に対する就職希求度の M が2.50未満になっている職業をみると、労務的な職業が多くみられる。そのうち特に「19. タクシー運転手」、「23. トラック運転手」、「26. バス運転手」、「34. 販売外交員」、「29. 漁業の職業」、「31. 自衛官」、「24. 給仕従事者」などは、職業に対する就職希求度が非常に低い職業である。

この結果は、館他（1984）および大根田（1992）の研究の結果とおおむね同様な結果が出ているとみてよいと思う。従って、労務的な職業は敬遠され、知的な専門的・技術的な職業が希求されていることがわかる。

2. 認知度の高い職業に対する就職希求の因子分析

職業に対する就職希求の因子構造をみるために、主因子法で得た6因子解（固有値1.00以上）について Varimax 回転をした（Table VIII）。抽出された各因子の因子名とその内容を次に述べる。第1因子は、個人の才能を生かして単独でも職業に就くことが出来る職業で「個人的才能の職業」、第2因子は、身体的労働を伴うことが多い職業で「労務的な職業」、第3因子は、人に接することが多い職業で「対人接触的な職業」、第4因子は、格好のよさということが関係する職業で「格好いい職業」、第5因子は、高度な専門的な知識や技術が必要な職業で「高度な専門的・技術的な職業」、第6因子は、かなりの専門的な知識や技術が必要な職業で「かなりの専門的・技術的な職業」、と抽出された因子をそれぞれ命

Table VII 認知度の高い職業に対する就職希求度の平均値と標準偏差 (N = 108)

順位	No.	職業名	M	SD	順位	No.	職業名	M	SD
1	4	鉱工業技術者	4.56	.63	19	35	画家・書家	2.63	1.25
2	17	情報処理技術者	3.81	1.15	20	14	記者	2.60	1.08
3	36	大学教授・研究者	3.61	1.08	20	25	アナウンサー	2.60	1.15
4	32	自動車整備士	3.26	1.08	22	6	建設の職業	2.44	1.05
5	22	制作・演出家	3.24	1.15	23	28	消防員	2.41	.90
6	3	教員	3.16	1.10	24	16	飲食店	2.37	1.00
7	20	パイロット	3.15	1.29	25	9	警察官	2.34	1.18
8	33	デザイナー	3.08	1.26	26	1	小売店	2.17	1.01
9	7	一般事務所事務員	3.07	1.07	27	13	農業の職業	2.13	1.01
10	5	裁判官	3.01	1.12	28	10	販売店員	2.04	1.04
11	27	管理的公務員	2.94	1.32	29	21	看護婦（士）	2.03	.92
12	2	職業スポーツ家	2.92	1.31	30	19	タクシー運転手	2.01	.92
13	8	医師	2.84	1.25	30	23	トラック運転手	2.01	1.02
14	30	調理人	1.77	1.16	32	26	バス運転手	1.89	.91
15	11	営業・販売事務員	2.70	1.22	33	34	販売外交員	1.86	.88
15	12	文芸家	2.70	1.21	33	29	漁業の職業	1.86	.92
17	18	俳優	2.65	1.33	35	31	自衛官	1.82	.90
18	15	音楽家	2.63	1.26	36	24	給仕従事者	1.69	.80

(注) 認知度の高い職業に対する就職希求度は5段階評定である。

名した。

この因子分析の結果は、労働省職業安定局・雇用職業総合研究所（編）（1986）「労働省職業分類（昭和61年版）」と比べてみても、大体妥当な結果だと思われるが、若干の相違があるといえ、自己実現欲求や社会的欲求ということが、本研究の結果では出ているので

Table VIII 認知度の高い職業に対する就職希求の因子分析結果 (N = 108)

No.	職業名	F1	F2	F3	F4	F5	F6	h^2
18	俳優	.72	.01	-.27	.29	.07	.20	.71
22	制作・演出家	.69	-.02	.01	.09	.18	.03	.52
33	デザイナー	.66	-.06	-.17	-.16	.26	-.32	.66
35	画家・書家	.65	.07	-.15	-.34	.34	-.12	.70
15	音楽家	.63	.06	-.37	.15	-.06	.19	.59
21	看護婦（士）	.60	.32	-.23	.02	.10	.02	.52
12	文芸家	.55	.04	-.16	-.36	.31	.06	.56
2	職業スポーツ家	.54	.09	.05	.05	.02	.07	.32
25	アナウンサー	.52	-.08	-.35	.26	.14	.28	.57
20	パイロット	.45	.19	.10	.40	.41	-.09	.58
23	トラック運転手	-.16	.75	.07	.09	.03	.09	.61
26	バス運転手	.02	.70	-.23	.18	.15	.14	.61
29	漁業の職業	.24	.69	-.16	-.29	.06	.19	.68
6	建設の職業	.14	.67	-.01	-.03	.00	-.07	.48
13	農業の職業	.05	.63	-.21	-.42	.01	.07	.62
28	消防員	-.01	.61	-.05	.15	.32	-.03	.49
19	タクシー運転手	-.11	.56	-.34	.31	.11	.13	.56
1	小売店	.14	.52	-.51	-.10	-.02	.08	.56
30	調理人	.44	.51	.15	-.06	-.28	-.05	.56
9	警察官	.36	.49	-.01	.20	.32	.02	.51
32	自動車整備士	.00	.46	-.09	.10	-.04	-.35	.35
16	飲食店	.24	.41	-.38	.13	-.28	.00	.47
10	販売店員	-.03	.24	-.82	-.05	-.15	-.09	.76
11	営業・販売事務員	.14	-.06	-.70	.09	.06	.07	.52
34	販売外交員	.08	.33	-.57	-.12	.16	.01	.48
14	記者	.26	.08	-.56	-.13	.17	.22	.48
7	一般事務所事務員	.04	-.05	-.52	.16	.15	-.11	.33
24	給仕従事者	.17	.37	-.51	.12	-.22	-.13	.51
31	自衛官	.06	.17	-.12	.59	.03	-.05	.40
36	大学教授・研究者	.08	.03	-.03	-.02	.74	-.25	.62
5	裁判官	.23	.12	-.16	.11	.69	-.08	.59
8	医師	.29	.09	.02	-.09	.65	.29	.61
27	管理的公務員	.22	.08	.07	.40	.50	.23	.52
4	鉱工業技術者	-.13	-.07	.02	.00	.16	-.61	.43
3	教員	.10	.03	-.20	-.05	.32	.43	.33
17	情報処理技術者	.29	-.17	-.22	.43	.06	-.42	.53
因子寄与		4.62	4.78	3.62	1.92	2.89	1.54	19.36
寄与率 (%)		12.82	13.27	10.05	5.33	8.02	4.29	53.77

はないかと思われる。それは、自己実現欲求に関係する「個人的才能の職業」とか社会的欲求に関係する「格好いい職業」とかの因子が抽出されたことが、その表れではないかと思う。本研究は、職業に対する就職希求についての調査であるので、個々人の職業に対する就職希求ということや自己実現欲求や社会的欲求に関することが、この因子構造にみられ、職業に対する興味や、関心、好き嫌い、などを含めた個性発揮という面の職業に対する態度の構造ということもできるのではないかと思う。

要 約

この研究の目的は、職業に対する認知の発達と、職業に対する就職希求の状態やその因子構造を明らかにすることであった。

被調査者は、大学工学部3年生、4年生の男子であった。

主な結果は次の通りであった。

1. 職業に対する認知の発達は、クラスター分析に基づいて3つに大別できた。小学校に入学する以前に認知した職業、小学校時代から中学校時代にかけて認知した職業、中学校時代から大学時代にかけて認知した職業であった。
2. 職業に対する就職希求は、専門的・技術的職業への就職希求が強く、労務的な職業への就職希求が低かった。
3. 職業に対する就職希求の因子分析に関しては、6因子が抽出された。

引用文献

- 橋本昭治 1973 職業認知構造の発達, 教育心理学研究, 3, 187-191.
- 橋本昭治 1974 職業的社会化, 斎藤耕二・菊池章夫 ハンドブック社会化の心理学 川島書店 Pp. 225-240.
- 広井 甫 1982a 職業社会化 藤本喜八・広井 甫・荒井昭雄・水戸谷貞夫・仙崎 武・田島信一(編) 進路指導の基礎知識 福村出版 p. 61.
- 広井 甫 1982b 職業観・勤労観 藤本喜八・広井 甫・荒井昭雄・水戸谷貞夫・仙崎 武・田島信一(編) 進路指導の基礎知識 福村出版 p. 64.
- 熊谷信順 1981 職業的好みと職業経験の継承性 雇用職業研究 No. 17, 19-23.
- 松本卓三・熊谷信順(編著) 1992 職業・人事心理学 ナカニシヤ出版
- 小川一夫・田中宏二 1979 父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, 27, 272-281.
- 大根田充男 1992 希望する職業の特徴 日本労働研究機構(編) 調査研究報告書 No. 32, 大学生の職業生活設計—大学生の職業生活設計に関する調査より— 日本労働研究機構 Pp. 28-37.
- 労働省職業安定局・雇用職業総合研究所(編) 1986 労働省職業分類(昭和61年版) 雇用促進事業団雇用職業総合研究所
- Super, D.E. 1957 *The psychology of career*. New York: Haper & Brothers.
- (スーパード. E. 日本職業指導学会(訳) 1960 職業生活の心理学 誠信書房)
- 竹内登規夫 1976 職業知識の発達 愛知教育大学研究報告 25, (第4部・教育科学編), Pp. 87-98.
- 田中 豊・垂水共之・脇本和昌(編) 1984 パソコン統計解析ハンドブックII 多変量解析編 共立出版 Pp.

226—251.

館 暁夫・松本真作・渡辺三枝子・松本純平 1984 現代大学生にみる職業志向性の一側面 雇用職業研究 No. 21, 29—38.

仙崎 武 1988 青年の進路形成と職業選択—その発達と指導 西平直喜・久世敏雄（編）青年心理学ハンドブック 福村出版 Pp. 576—602.

付 記

本研究の一部は、日本心理学会第54回大会及び日本教育心理学会第32回総会にて発表した。

The Cognitive Development and the Employment Hope for a certain Occupation

Takuso MATSUMOTO

Faculty of Science,

Okayama University of Science

Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan

(Received September 30th, 1994)

The purpose of this study is to clarify the processes of cognitive development, the hope for employment in a certain occupation, and its factor structure. The subjects were male college seniors and juniors whose field of study were technologically related. The results were as follows : 1) The cognitive development for a certain occupation could be classified roughly into three classes by mean of cluster analysis. Three classes are : the occupations the subjects had recognized before entering an elementary school, the occupations the subjects recognized from their elementary school days to junior high school days, and the occupations the subjects recognized from their junior high school days to up present. 2) As for their hope for employment, special and technical occupations were high, while labor occupations were low. 3) Through factor analysis of hope employment, six factors were extracted.